

国語プリント No. ( )

年 組 番 名前

配布日 月 日 曜

## 文章講座② ～メタ・ディスコースを削る～

文章を書いていると冗長（じようちよう）（述べ方が長つたらしく、無駄のあること。）になる。それはどうしてかという、書いているうちにあてもないこうでもないと考え、だから書いてしまうからだ。また、自分の表現に自信がなくなり、言い訳めいて「～と思う」「～ではないだろうか」「～もない。」というように、婉曲（はんきよく）（表し方が遠回しなこと。）表現になってしまふのだ。

しかしそれらは書き手の言い訳であつて、読み手は一切そんなことは気にしない。読み手は「つまり何が言いたいのか？」と思ひながら読んでゐる。書いてあることが回りくどいと読む気がなくなる。読み手はダイレクトに伝わる文章を求めているのだ。

以下の説明は「自己表現力の教室」（向後千春他著 情報センター出版局）からの引用である。「メタ・ディスコースを削る」とはどういうことか読んでみよう。

「文章を書いているとつい長くなってしまふ」という人がたまに居る。こういう人の文章は「自分はこの文章をこういう気持ちで書いていて、こんな風に読んでほしいのだ」という説明が多い。これを「メタ・ディスコース」という。

メタ・ディスコースというのは、「いま書いている内容について、それを読者にどのように理解してほしいか」について書いたものである。次の例文を見てみよう。

私がこの記事で書くように編集者から提示されたテーマは、情報教育であつた。ここで私が主張したい最も重要なことは、情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならないということだ。しかし、私が見るところでは、教員自身の情報化は悲惨なほど進んでいない。これが私の考えの出发点である。

まず最初の文「私がこの記事で書くように編集者から提示されたテーマは、情報教育であつた」はすべてメタ・ディスコースである。これは、「これから書く内容が情報教育である」ということを読者に伝えている。

次の文の先頭「ここで私が主張したい最も重要なことは」もメタ・ディスコース。続く内容を読者に強調したいということを伝えている。そして、内容がくる。「情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならないということだ」。これが内容になる。

次の文の先頭「しかし、私が見るところでは」もメタ・ディスコース。自分が観察した範囲内という限定で、事実の限定をしている。「教員自身の情報化は悲惨なほど進んでいない」の中の「悲惨なほど」というのもメタ・ディスコースである。作者が読者に「悲惨さ」を感じてほしいことを伝えている。最後の文「これが私の考えの出发点である」もメタ・ディスコース。

つまり、この文章の大部分がメタ・ディスコースからなっている。もし、メタ・ディスコースを全部削って書き直してみると次のようになるだろう。

情報教育が学校でうまく指導されるためには、まず教員自身が情報化されなければならない。しかし、教員自身の情報化は進んでいない。

もともと153文字あつた文章が、62文字になった。半分以上である。両方の文章を読み比べてみると、どうだろうか。字数の多い文章のほうが、書き手の力が人っているのが見えるのに対して、メタ・ディスコースをすべて削つた文章は、素っ気ない。素っ気ないけれども訴える力は強い。なんの躊躇もなく中心的な問題に切り込んでいく小気味よさがある。

用心深く文章を書く、ついメタ・ディスコースが多くなってしまう。しかしその部分をできるだけ削るようにすると、短くても訴求力の強い文章を書くことができる。

ちなみに、このプリントの冒頭の文章（285文字）をメタディスコースいっぱいに書き直すところなる。

文章を書いていると冗（じょう）長（ちやう）（述べ方が長ったらしく、無駄のあること。）になると思う。それはどうしてなのかということを書いてみると、書いているうちにああでもないこうでもないと考え、だから書いてしまうからではないだろうか。また、自分の表現に自信が無くなったり、言い訳めいたりして「～と思う」「～ではないだろうか」「～なくもない」というように、婉曲（えんきよく）（表し方が遠回しなこと。）表現をしてしまうということが挙げられる。

しかしそれらは書き手の言い訳という理由が挙げられると思うが、読み手は一切そんなことは気にしないと思う。読み手は「つまり何が言いたいの？」と思いつながら読んでいないか。書いてあることが回りくどいと読む気がなくなる人は多いはずだ。読み手はダイレクトに伝わる文章を求めているというのが一般的な意見になるはずだ。（361文字）

76文字も無駄に使っていることがわかる。

婉曲表現には、次の種類がある。これらは話し言葉では、間を空けて相手の理解を促す時間として使えるが、書き言葉では必要ない。書いてある文章を読むのは、読み手であるし、読み手は自分のペーシングで読み続けたり、ちよつと読むのをやめて考えたり、もとに戻ったりできるからだ。文章を書くときは、次のような言葉を使うのを避けよう。

文末

（イ）「これはあくまでも自分個人の考えた」と濁す。

……「～と思う」

（ロ）自分で言い切らず、読み手に判断を任せる。

……「～ではないだろうか」「～でしょう」「かもしれない」「～かも」「～かな？」

（ハ）「思った」「考えた」よりもさらに主張の弱い、「自分の感覚」として表現する。

……「～と感じ」

（ニ）自分が考えたことではないと、責任の所在を不明確にする。

……「～らしい」「～のようだ」

附属語（単語に付ける語）

（ホ）無意味に複数を表すことによって、「それだけではないよ。」というニュアンスを含ませる。

……「～とか」「～など等」

（ヘ）その語を断定せず、他のものも含む意味を匂わせる。

……「～系」「～的」「～のほう方」

文頭

（ト）読み手に自分の主張を強く印象づけようとする。

……「～やっぱり」「～結構」

（チ）自分の「感覚」または、受け売りだということを匂わせる。

……「～なんか」

（リ）与えられたタイトルを冒頭に再度書き、自分の筆を進めさせる。

……「～については……」「～について自分なりの考えを書く。」

練習

次の文章は「1年間の学習で『生きる上で役に立つ』と学んだことを書きなさい。」という課題の作文である。メタ・ディスコースを除いて書き直してみよう。（・縦書き原稿用紙の書き方・書き言葉に直す・常用漢字は漢字にする・文末を統一する（常体））

1年間の現代文で学んだことは、授業の始めの10分かならず読書をしてきたことである。これは役に立ったんじゃないかなと思う。次は作文の書き方など。ラベリングなどはこの書き方を知っていてそんはないと思った。だから役に立ったというよりは習っていてよかったといった感じである。あとは言葉の意味調べなどは辞書などの使い方がわかる。やっぱり作文とかが一番役に立ってるんじゃないかなと思います。